

学位論文内容の要旨

論文提出者氏名	駒ヶ嶺裕子
<p>(論文題目)</p> <p>統合失調スペクトラム症を中心とした精神障害者の自立とその自立を達成させる要因の研究—当事者、家族、地域支援者の自立認識の相違から地域移行・定着の方法を探る—</p>	
<p>精神保健医療福祉の改革ビジョン（以下：改革ビジョン）の「入院医療中心から地域生活中心へ」が示されてから約 20 年経つ現在も、入院患者数には減少がみられるものの、平均入院日数については、ほぼ横ばいの状態が続いている。1993 年に精神障害者が障害者基本法の対象として明確に位置付けられてから、保健医療施策に加えて福祉施策の充実を図ることが求められてきた。しかし、社会資源の不足や、長期在院者の高齢化による社会復帰の困難さ、家族主義的福祉を前提とした家族同居による経済的、精神的負担、支援者とのパターンリズム的な関係性による干渉、制限などの問題から、精神障害者の地域生活への移行・定着は未だ不十分な状況にある。</p> <p>そこで、本研究では精神障害者の自立支援を見直す時期に来ていると考え、当事者、家族、地域支援者それぞれが考える当事者の自立認識を検証し、地域移行・定着の方法を考える。検証するために少子高齢化と人口減少が顕著で社会資源が欠乏しがちになる地域を秋田県県北地域において、就労継続支援 B 型事業所を運営する NP0 法人 3 事業所を利用する当事者、その家族、地域支援者から協力していただいた。</p> <p>本研究の論点としては、当事者が考える自立と自立を達成させる要因の関係について、自立の多面性と受援を含む自立の 2 つに注目し、（1）自己決定が自己責任と受け止められ経済的自立に比重が置かれる社会的背景、（2）自立を支える社会資源が欠乏しがちになる少子高齢化と人口減少の進行、とした。また、当事者、家族、支援者のインタビュー結果をもとに作成したマトリクスと、それをもとに自立とその達成要因につながるキーワードとしてまとめたマトリクスの 2 つを用いて考察を深めた。マトリクスは、縦軸を当事者の「年齢」「居住形態」とし、横軸を「自立の多面性」「受援を含む自立」「自己責任化」「社会資源の欠乏」の 4 点とした。</p> <p>その結果、当事者、家族、地域支援者の当事者の自立における共通点、相違があること、高齢化が進む社会にあって、高齢を迎えた当事者特有の自立認識を尊重する対応が求められていることがわかった。</p> <p>具体的に一つは、高齢を迎えた当事者特有の自立認識を尊重する対応である。地域で生活する当事者・家族・地域支援者は、将来において病院に戻るということは考えていないことから、地域に生活拠点を置いて終末を迎える</p>	

という仕組みづくりを考える必要がある。そのためには、障害をマイナス面から捉えるのではなく、当事者が自らの病気を認識して、置かれた状況を受け入れられるように支援することが大事である。

次に、支援者の経験年数により障害認識や当事者への支援方法に違いが見られた。経験年数の浅い支援者は、当事者が病気への正しい認識を持つことや、日常生活を送るための技能やルールをきちんと身につけることが必要であると考えており、社会との接点、交流などを求める指導的な傾向がある。一方で、ベテランと呼ばれる支援経験者は、地域を拠点とした生活者であることに重点を置き、当事者が「ありのまま」に自身の障害を受容して、個々の生活にあわせた暮らしができることを自立と捉えている。当事者に比して障害をマイナス面から捉えるのではなく、自らの置かれた状況を受け入れつつ、他者の支援を得ながらも自分なりの社会生活への対処方法や働き方、生きがいを見つけるなど、前向きな生活を目指すべきであるとする考えをしている。こうしたベテラン支援者の考え方や支援技術を施設内外の研修等を通して、経験年数の浅い支援者と共有する機会を設けるとともに、互いのスキルアップを図ることが必要である。

最後に、家族や、経済的な自立の認識が強い若年の当事者についてである。家族は特に親の場合、支援者であり家族であるという立場から、当事者の経済的な自立に期待しつつも、親亡き後の生活をどのようにして維持していけるようにするかという切実な問題を抱えている。きょうだいを頼りにしたいけれどもきょうだいにもそれぞれの生活があり、簡単にはいかない状況にある。地域生活を安心して過ごすためには、福祉サービスの利用や、相談の場における支援者とのかかわりを通して日常生活の改善を図っていくこと、それがきっかけとなって精神安定が図られ、夢や希望、目標を持つことで訓練や生活力を身につけるということが重要である。この点を進めるためには、地域の多様な人々が、そうした自立認識の存在を受け入れることが重要である。そのためには、当事者、家族、専門職の協働により、障害者支援ボランティアとしての家族会や当事者の会への参加、障害者理解・支援講習会の開催など地域住民向けの働きかけを積極的に行っていく必要があると考える。

これらの手がかりとしては、「障害をマイナス面から捉えるのではなく、当事者が自らの置かれた状況を受け入れつつ、他者の支援を得ながらも自分なりの社会生活への対処方法や働き方、生きがいを見つけるなど、前向きな生活を目指すべき」とした自立の認識が、経験年数が一定以上の支援者に共通するとして見いだされることである。同時に、自立が描きにくくなってきている家族や、経済的な自立の認識が強い若年の当事者との共有化も課題である。その第一歩として、地域の多様な人々が、そうした自立認識が存在することを受け入れることが重要であると考ええる。

キーワード：

統合失調スペクトラム症、精神障害者、自立認識、地域移行、地域定着